

毛沢東の「新民主主義」概念について

—— イデオロギーと権力の関係への一つの視角 ——

とく だ のり ゆき
徳 田 教 之

はじめに

中国では1958年代から、「毛沢東思想」を媒介として、毛沢東に対する個人崇拜が強化されてきたが、それは今や狂信的段階に達しつつあるかにみえる。最近の中国における毛沢東評価では、すでに、「毛主席はマルクス・レーニン主義を天才的・創造的・全面的・完全・系統的に発展させた。…毛沢東思想は、現代のマルクス・レーニン主義の最高峰であり、もっとも高度でもっとも生きたマルクス・レーニン主義である」(注1)とされている。このような党主席の「思想」は、神聖不可侵な「百科全書」として、中国人民のすべての生活領域に適用されるために、「学習」を要求されているのである。

「7億人の毛沢東学校化」は、かつてのスターリン主義の論理と同じく、思想の知的な、あるいは、理念的な受容ではなく、全知全能の指導者への全体的自己同一化であろう。それは、社会主義を信ずることではなくして、毛沢東を信ずることである。権力の人格化の頂点において、毛沢東の口から流れ出る一言一句、はてはかれの水泳に至るまでの行動が、魔術的な権威をもって、イデオロギーの創造的発展に結びつけられてくる。このような段階においては、イデオロギーはますます、理論としての純粋性、一貫性を失い、マキャベリストイックな権力者のための論理へと転落してい

く。ここでは、イデオロギーは「聖域」となる。

そもそも、共産主義的政治体制における国定イデオロギーとしての政治指導者の理論とか政策は、元来純粋なイデオロギーの発展としてとらえられるべきものではなからう。そこには権力とイデオロギーの相互依存関係から生まれてくるイデオロギーのすぐれた政治性が存在しているのである。今ここで、行動とイデオロギーの関係について論じた、K・マンハイムの言葉を思い起こしてみよう。かれは、ナポレオンの「人間というもの、は、実践してそれから考察する」という言葉を引用して、「社会主義的・共産主義的な理論は、直観主義と現象について極端に合理化を図る意志とを、総合したものである」(注2)と述べた。本来、マルクス主義の理論的発展という問題は、このマンハイムの指摘をどう取り扱うかにかかっているといえよう。だが、現実の共産主義運動においては、共産党のリーダーシップの権威主義的傾向によって、本来内在するこのような理論と行動の分離の問題は、行動の理論的正当化という方向で、政治的に処理されてきたのである。しかしさらに困難な問題は、同一指導者の理論的・行動的体系の非連続性、もしくは前後の理論的矛盾であろう。これは、その政治体制内部においては、批判者の権力的抑圧と、大衆のカリスマ的指導者に対する全体的自己同一化＝帰依によって、切り抜けることができるであろう。しかし、それは、外国の真

面目なマルクス主義的学者にとっては、きわめて当惑すべき難題となるのである。

毛沢東の理論は、このような観点からみると、「解放」以来いくつかの変化の過程を示し、新しい「理論」の創造を行なっているものである。したがって、現在の視点からみると、毛沢東理論の過去の前提のいくつかは、崩れ去っているものもある。特にそれは、1957年後半から現在に至る時期についての理論的・政策的傾向については著しいといえよう。これらのイデオロギー的变化はすべて、中ソ対立や国内の政治・経済等の状況の変化に対応して起こったもので、イデオロギーの政治的操作性の典型が、ここに示されているといえるべきである。

本稿の主題である、1953年後半から現われた、中国革命の発展段階の概念規定を改訂する問題は、このようなイデオロギー上の変化の最初の現われとみるべきものであろう。この革命段階をどう規定するかという問題は、毛沢東理論の骨子をなすものであっただけに、当時、わが国の中国学界でも議論をよんだのだった。高橋勇治教授の「それは、事実われわれに形容しがたい異様な衝撃をあたえた」(注3)という言葉からも、その困惑ぶりが理解されるであろう。われわれは、「権力とイデオロギー」という視点から、今この問題をふりかえり、毛沢東理論における「新民主主義」という概念の構造的特質、その概念規定の変更のもつ政治的意味などについて、若干の考察を加えることによって、中国における権力構造の実体的把握のために、一つの分析視角を設定することは、無意味ではないように思われる。

(注1) 『人民日報』、1966年6月1日、人民日報編集者の言葉。

(注2) Karl Mannheim, *Idiology and Utopia*, 1952, p. 114.

(注3) 高橋勇治、『中国人民革命の研究』、151ページ。

I 社会主義革命段階説

今日では、中国の政治体制は、「プロレタリアート独裁」と規定するのが、中共の公式の見解である。このような見解が党の公式の見解として提出されたのは、いうまでもなく、1956年9月の中共八全大会における劉少奇の『政治報告』においてである。劉少奇はこのとき、次のようにしている。

「中華人民共和国が成立してから、労働者階級は数億の農民との間に強固な同盟をうちたて、その条件の下に全国的な支配力をかちとったので、労働者階級の政党である中国共産党は、全国の政権を指導する政党となり、人民民主独裁は実質的にプロレタリア階級独裁のひとつの形式となった。このことはわが国のブルジョア民主革命が平和の道を通じて、直接プロレタリア階級の社会主義革命に転換することを可能ならしめたのである。したがって、中華人民共和国の成立は、わが国のブルジョア民主革命の段階が、基本的に終わりを告げ、プロレタリア階級の社会主義革命の段階が始まったことを示すとともに、わが国が資本主義から社会主義へ移行する過渡期が始まったことを示している」。

しかし、このような見解は、1940年代の毛沢東の革命段階論についての一般的理解とは矛盾するものである。劉少奇の上記の見解が形成される端緒となったのは、1953年後半期の「過渡期の総路線」の提起からであった。新見解は、最初は古い毛沢東の理論の影響から免れず、中間的な曖昧な形態で表明されている。1953年7月に、許瀚新は『広義政治経済学』第3において、まず次のよう

に述べている。「1949年の中華人民共和国の成立は、中国の新民主主義革命の完結を示すものである。それはこのとき、中国人民は帝国主義、封建主義、官僚資本主義の支配を打倒し、並びに、人民民主政権を建設したからである」(注4)と。こういう論理で、許滌新は第1段階の終了を規定したのであるが、その後、この見解は中共の公式見解としてさらに明確化されてきた。1953年9月25日、中華全国工商連合会代表者大会において、中央政府財政経済委員会副主任李維漢は、「過渡期における国家の全般的方針」と題する講演を行なっているが、そのなかでかれは、「中華人民共和国の成立は、中国革命の第1段階が終わり、われわれがいまそのなかで生活している中国の新民主主義社会は、つまり、一つの過渡的性質の社会であることを表示している。その過渡的な性質の特徴は社会主義要素(ウクラード)が、いままさに一步一步発展し、非社会主義的要素が一步一步改造され、そして、国家の社会主義的工業化を一步一步実現する基礎の上に、中国を偉大な社会主義の国家につくりあげる、というところにある。この段階が過渡期とよばれる」(注5)と言明している。1954年1月の劉少奇の報告「過渡期に関するレーニン主義の学説」は「中国人民は中国共産党の指導のもとで、革命の第一段階の徹底的勝利を獲得し、社会主義へ通ずる大道を切開いた。……中華人民共和国の成立をメルク・マールとして、既に中国は社会主義革命、即ち社会主義的改造の新しい時期、社会主義へ一步一步移行して行く時期にはいつている」(注6)と述べている。同じ時期に、朱徳は「レーニン主義は社会主義建設のために戦う中国人民の旗である」という論文において、「革命戦争を通じ帝国主義、封建主義及び官僚資本主義の中国における支配が打倒され、1949年には、労働者

階級に指導され労働同盟を基礎とする人民民主専政が樹立された。こうして基本的には、中国の新民主主義革命の段階が終り、社会主義革命の段階に入ったのである」(注7)と規定している。鄧拓も、新民主主義論に依拠しながら、新民主主義社会の成立によって、第1段階は基本的には完成した(注8)と断定している。

このような中国革命の新しい段階規定の出現に伴って、社会主義革命段階説を基礎づけるために、人民民主専政の階級的な性格について、新しく解釈し直す動きが出てきたこともみのがせない。劉光弟の論文「ソ同盟のネップ期と中国国民経済の復興期について」は、中国革命の現段階を第1段階の終結後の社会主義社会への発展の段階であると規定した後に、ソ連の過渡期と比較して、「生産関係についていえば、当時のソ同盟には、五つの経済要素が存在していたが、わが国もそれに類似しており、政治制度についていえば、我国の人民民主専政はソ同盟のプロレタリア独裁と同じ型の政治制度である」(注9)(傍点筆者)と述べている。しかし、この段階では、人民民主専政をプロレタリア独裁と同一視する見解は、まだ支配的とはいえず、第1段階の終了を規定する許滌新も、「新中国と欧州の各人民民主主義国家は、すべて、人民民主専政の国家である。国体(=政治形態——筆者)については、すべて労働者階級が指導し、労働同盟がその基礎となっている。ただし、中国の人民民主政権は、民族資産階級を参加させているが、欧州の各人民民主国家はこうではない。中欧と東南欧の各国の人民民主専政は、プロレタリア独裁の一種の形式であるが、これは、プロレタリアートがブルジョアジーに対して行なう独裁であり、それによって、資本主義とブルジョアジーとを消滅させるものである。現在の中国においては、独

裁を行なう対象は、ただ帝国主義、封建主義、および官僚資本主義に限るのであって、一般的に資本主義とブルジョアジーとを消滅させようとするものではない」(注10)と、きわめて曖昧な表現をつかい、人民民主専政の「階級的な性格」を明確に規定することを避けたのであった。

この社会主義革命の段階であると規定する新理論は、それまでの通説であった、人民共和国成立以後の段階をも、第1段階すなわち新民主主義革命の段階として規定する立場とは、まっこうから対立するものであることは、明らかであろう。だがこの理論は、よく検討してみると、1940年頃の毛沢東の理論のある側面からの解釈と、それと同時に、1953年の憲法草案に現われた新しい毛沢東の見解とを、反映していることがわかるのである。したがって、同じ毛沢東の理論を基礎としながらも、二つの異なった説明が現われてきたことは、毛沢東の「新民主主義」という概念、あるいは「過渡期」という概念を、内在的に分析する必要性を必然的に生じてくるのである。毛沢東の「理論」に矛盾や、概念的な不明確さはないのだろうか。

(注4) 許濂新著、『広義政治経済学』、第3巻、北京、1954年1月、7ページ。

(注5) 中国研究所、『中国経済年報』5、204ページ。

(注6) 新民主主義経済研究会編訳、『中国革命の理論』、上巻、23ページ。

(注7) 同上、28ページ。

(注8) Teng To, *China's General Line of Transition to Socialism*, People's China, 1, 1954.

(注9) 新民主主義経済研究会、前掲書、122～123ページ。

(注10) 許濂新、前掲書、8ページ。ここにおける許の論述は、通説においては、先の新民主主義革命がすでに完結したとする規定と矛盾することは明らかである。新民主主義革命の対象が、帝国主義、封建主義、官僚資本主義に向けられることは、一般に認められて

いる。マスレンニコフは、「ただちに社会主義を建設するという任務は、今日の中国人民民主主義——ブルジョア民主主義的＝反帝国主義的＝反封建的革命の任務の完成と、中国の非資本主義的發展への過渡的段階である中国人民民主主義發展の第1段階——のまえには、まだ提起されていない」(『社会科学の諸問題』I、145ページ)と述べている。1950年9月25日付の『プラウダ』は、「中国の人民民主主義は、現段階ではプロレタリアートの独裁形態ではない。……革命の目標は、ブルジョア民主主義革命の課題を完遂するにある。……反帝革命が勝利した革命の鋒先は、国内の人民民主主義的課題の解決、反封建革命つまり農業革命の完遂にむけられている」(『思想』、352号、51ページ)と論じている。

II 新民主主義革命概念の曖昧性

毛沢東の中国革命理論においては、二つの異質的な革命過程の区別と成長転化の概念は、新民主主義革命、新民主主義(社会)、社会主義革命、社会主義(社会)の範疇的区別を明確にしていない。おそらく、この概念上の曖昧性が、従来の新民主主義革命段階説を基礎づけると共に、一方では、それと異なる社会主義革命段階説を導き出したのであろう。われわれは、『中国革命と中国共産党』、『新民主主義論』、『連合政府論』などの毛沢東の論文の中に、これらの互いに矛盾する段階規定を可能ならしめる言葉が、混在しているのを指摘することができる。

『中国革命と中国共産党』において、毛沢東は中国社会を、植民地、半植民地、半封建社会と規定して、中国の近代社会における各種の矛盾の中で、帝国主義と中国民族との矛盾がもっとも主要な矛盾であると述べた。この前提から、中国革命の任務の第一歩は民主革命と民族革命であるとして、統一的に把握される。「この植民地、半植民地、半封建的社会形態を一つの独立した民主主義の社会に変えることである」(注11)という毛沢東の言葉は

確かに、新民主主義革命の主要な課題を象徴的に示唆しているといえよう。しかしながら、かれの規定に従えば、中国革命の「第一段階は決して中国ブルジョアジーの独裁する資本主義社会を建設することではなく、また建設できるものでもなく、中国のプロレタリアートを先頭とする中国の革命的諸階級の連合独裁による新民主主義社会を建設することであり、それによって、この第一段階は終るのである。そののちに、更にこれを第二段階に発展させ、それによって中国の社会主義社会を建設するのである」(注12)。このような毛沢東の理論構成は、確かに、第1段階の目標としての独立民主の共和国＝革命的諸階級の連合独裁国家の樹立によって、第1段階は完結するという理論的根拠を提供しているかのようである。では、「一切の必要な条件がそなわったときに、それを社会主義の革命の段階に転化さす」(注13)と述べるかれの規定から、この共和国の成立を、それだけで「一切の必要な条件の完備」とみることが可能であろうか。だが、共和国成立以後、この新民主主義社会が「社会主義の革命の段階」の範疇にはいるか否かは、かれにおいては曖昧で、むしろ、後述するように、新民主主義革命の段階にはいるとする傾向のほうが強い。しかし、一方この新民主主義(社会)が、新民主主義革命＝第1段階の範疇にはいるという毛沢東の言葉の上での断定的規定も、われわれは見いだすことができないのである。

毛沢東によれば、中国革命の全過程は、異なった任務を遂行するために二つの段階に区分されている。すなわち、先にあげた独立民主の社会の建設というブルジョア民主主義的性質の革命が第1段階であり、第2段階は革命を發展させ社会主義社会を建設することが任務となっている(注14)。第1段階は第2段階の必要な準備であり、第2段階

は第1段階の必然的發展の方向である(注15)。このような二つの革命段階の区別と成長転化の理論において、かれが指摘した、「革命を發展させる」という言葉は、具体的にいったいどう理解されなければならないのであろうか。この点に関しても、かれの論理の曖昧さを認めざるをえない。

毛沢東の新民主主義の概念は次のような特異性をもっている。この新民主主義革命の段階は、「過渡的な形態であり、他のものとりかえることの出来ない必要な形態である」(注16)(傍点筆者)と規定されるが、一方においては、資本制的發展の道を清め、他の一方では社会主義のための前提を創出する「新しい特殊なブルジョア民主主義革命」であるとも規定される。この新民主主義革命の段階は、また、「植民地、半植民地、半封建社会をおわりにして、社会主義社会をうちたてるあいだの一つの過渡的段階である」(注17)(傍点筆者)。したがって、このような毛沢東の規定によれば、1940年頃のかれの過渡期概念は、1919年の「五四運動」を起点とする新民主主義の革命過程をその内容としていたのである。しかも、この「過渡的段階」は社会主義がうちたてられるまで続く段階として、規定されていると断定できる。かくて、新民主主義(社会)の段階は、新民主主義革命の過程に当然包括されることになり、しかも、新民主主義革命と社会主義革命とは区別の不可能なものとなっている。それとともに、毛沢東は第2段階を社会主義の革命の段階と規定はしているが、第2段階とは社会主義社会が成立した後の段階とも理解されるものとなるのである。だが、周知のように、レーニン・スターリンの革命理論においては、社会主義革命とは、社会主義的ウクライドのできあがった形態が存在しないか、あるいは、ほとんど存在しないときに始まり、権力を獲得して、新しい社

会主義経済を建設しとげる過程であった^(注18)。

毛沢東のこのような過渡期概念の不明確さをおぎなう理論として、第1段階をまた段階的に区分しようとする試みが、当時日本の学界でなされたが、毛沢東はただ、「この革命の第一段階——それはまたたくさんの小段階に分かれる」^(注19)と指摘しただけである。沈志遠は、このような概念上の曖昧さを基礎としているために、その著『新民主主義経済論』において、誤りをさらに拡大している。すなわち、第1段階としての新民主主義が、社会主義への全過渡期を通じて、過渡期そのものの二つの発展段階を経過することを指摘して、一つが社会主義への移行のための物質的前提を準備する段階であり他は直接社会主義へ移行する段階であると規定するのである。そして、この直接社会主義へ移行する段階は、私的資本主義要素の比重が相対的にも絶対的にも縮小する段階である。そのときになると、それは日ましに社会主義へ接近はしているが、しかしまだ社会主義にははいらないで、いぜんとして新民主主義である^(注20)と説明されている。こういった沈志遠の見解の中では、われわれはただ社会主義革命の段階が消えさせているのを発見するだけである。

毛沢東の「新民主主義」概念は、以上のように、不明確な点が多いが、この概念の具体的内容として、政治形態や社会経済的構造が規定されていた。そして、1953年までの通説では、「新民主主義」段階を、人民民主専政の階級的 성격や、政権が当面する社会経済的課題の性質からも、社会主義革命の段階ではないと規定したのであった。

すでに指摘したように、社会主義革命の開始の時期を、古い毛沢東の理論から矛盾なく解決することが困難なのは明らかであろう。そこでこの問題を解決する理論として現われたのが、中華人民

共和国憲法草案前文における、「中華人民共和国の成立から、社会主義社会を建設しとげるまで、これが一つの過渡期である」^(注21)という規定であった。だが、ここにおける「過渡期」という概念が、すでにその出発点を異にしていることから明らかなように、これは毛沢東理論の直接的、必然的發展としてとらえることはできまい。この「過渡期」は、社会主義的改造の段階を意味するものである。しかし、このような規定においても、1952年までの経済復興段階を、社会主義的改造の時期に含めてとらえるか否かという問題が残るのである。

1940年前後に書かれた毛沢東の論文には、人民共和国成立以後の段階での中国社会の社会主義化に関する具体的論究は見いだされない。もちろん、それは当時の革命段階においては、論究がそれなりの歴史的限界をよぎなくされたということでもあろう。また、『新民主主義論』が、国民党との抗日統一戦線の戦略に理論的構造を提供するとともに、その反面では、未来において予想される統一戦線の崩壊後の状況に対して、党の準備をしておく^(注22)、という複雑な政治的配慮のためであったかもしれない。しかしながら、それなりにおいて、やはり、毛沢東の過渡期概念には、すでに指摘した曖昧さと混乱のあることは否定できないのである。

そして、この毛沢東理論の特質を、ボルシェビズムの過渡期概念と比較してみると、毛沢東がそれをロシアから受け継ぎ、しかも、ロシア革命においては明確な形態をとって、現実化することのなかったこの概念的曖昧性を、予期しなかった中国革命の現実の前で、露呈せざるをえなかったことがわかるのである。では次に、ボルシェビズムにおける革命段階論について簡単な検討を試みることにしよう。

(注11) 『毛沢東選集』, 第4巻, 三一書房版, 224ページ。

(注12) 同上, 231ページ。

(注13) 同上, 202ページ。

(注14) 同上, 224ページ。同書222ページには、また「中国革命の歴史的進展過程は二つのステップに分けられなければならない。その第一歩は民主主義革命であり、その第二歩は社会主義革命である」と述べている。

(注15) 同上, 203ページ。

(注16) 同上, 236ページ。レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』(106ページ)には、「専制制度との闘争は、社会主義者の一時的過渡的な任務である。だが、この任務を無視したり、軽視したりすることは、社会主義にたいする裏切りおよび反動への奉仕に等しい」と述べられている。

(注17) 同上, 197ページ。原文では次のようである。「這種新式の民主革命雖然在一方面是替資本主義掃清道路, 但在另一方面又是替社会主義創造前提。中国現時的革命階級, 是為了終結殖民地, 半殖民地, 半封建社会和建立社会主義社会之間的一個過渡的階段, 是一個新民主主義的革命過程」(『毛沢東選集』, 2巻, 642ページ)。

(注18) 『スターリン全集』, 第8巻, 36~37ページ。

(注19) 『毛沢東選集』, 231ページ。原文では次のようである。「這個中国革命的第一階段(其中又分為許多小階段)」(『選集』, 2巻, 664ページ)。

(注20) 沈志遠著, 山下竜三訳, 『新民主主義經濟論』, 34~37ページ。沈志遠は本書において、新民主主義はどの範疇に属するか、それは一つの独立した歴史段階、独立した社会經濟構成であるかという問題について、「それは、資本主義であり」、同時にまた資本主義「ではない」。そして、社会主義「であり」、同時にまた社会主義「ではない」。「……部分的には社会主義的であり、また、部分的には資本主義的である過渡的な經濟である」といい、また、「新民主主義は独立した歴史段階ではなく、……独立した社会經濟構成ではない。しかし、それは人民民主主義国家の歴史的発展の過程において、かならず、それを経過しなければならない段階ではあるが、それは絶対、独立した歴史段階ではなく、ただ過渡的段階にすぎない」と述べている。しかしながら、1953年の「過渡期における総路線についての基本的認識」という論文では、まえの立場

を自己批判して、「中華人民共和国の成立で、新民主主義革命の歴史的な任務は、達成された」と述べてから、それ以後の「新民主主義經濟は、……完全な社会主義經濟体制に転化する一つの過渡的タイプの經濟である」と規定し、「新民主主義それじたいはもとより社会主義ではないが、それは疑いもなく社会主義体制にぞくする」と断定しているが、これらも前説との差異は実質的には乏しく、皮相な概念論である。

(注21) 中国研究所発行, 『中国資料月報』, (中華人民共和国憲法草案), 第78号, 21ページ。

(注22) Brandt, Schwartz, Fairbank, *A Documentary History of Chinese Communism*, 1952, p. 260.

III ボルシェビズムの理論的盲点

レーニンはコミンテルン2回大会における報告で、十月革命以後の民族主義運動に一つの展望を加えている。すなわち、コミンテルンと共産党は、後進諸国における民族主義運動=ブルジョア民主主義運動に対して支持を与え、それを勝利させなければならないというのである。そして、民族運動が勝利した後は、党と革命的プロレタリアートは指導と援助を行なって、後進諸国をソビエト的機構へ移行し、その後一定の発展段階を経て共産主義へ移行し、資本主義的発展段階を素通りすることができるというものであった。だがこの展望をよりいっそうイデオロギー的に理論化することを、レーニンはしなかった(注23)。1926年に至って、スターリンは論文『中国革命の見通しについて』の中で、「中国革命がブルジョア民主主義革命であると同時に、中国における外国帝国主義の支配にたいして、その鋒先をむける民族解放革命である」(注24)という特質から、「中国における来るべき革命権力は、その性格からいえば、大体において1905年にロシアで語られたような権力、すなわちプロレタリアートと農民の民主主義的独裁の様なものを思い起させるだろうが、しかし、中国

の権力は主として反帝国主義的な権力となるだろうという違いがある。それは中国の非資本主義的な発展への、より正確に言えば、社会主義的な発展への、過渡的な権力となるであろう」(注25)と述べている。こうして、スターリンによって、中国における社会主義的な発展への過渡的な権力が、「プロレタリアートと農民の民主主義的独裁」であることが、初めて規定されたのである。中国における革命権力の性格についての解釈が、この規定を基礎としていることは明らかである(注26)。では、「プロレタリアートと農民の民主主義的独裁」という概念は、ボルシェビズムの理論の中では、どのような歴史的な性格をもつものとして規定されているのだろうか。

周知のように、この過渡的な権力の概念は、レーニンの『人民の友とは何か』(1894年)、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』(1905年)などの論文の中で一応定式化されている。その基本的性格を要約すれば以下のようなものである。レーニンはロシア革命の発展過程を2段階に区分している。第1段階では、プロレタリアートが農民と同盟し、農民を指導することによってツァーリズムを打倒して、完全な政治的自由、民主共和国を建設するのである。この「ツァーリズムにたいする決定的勝利」は、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁である。この「独裁なしには、地主と大ブルジョアとツァーリズムの抵抗を打破することも、反革命的企図を撃退することもできない。しかし、それはもちろん社会主義的独裁ではなくて、民主主義的独裁である」(注27)。しかしながら、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁は、無条件に、社会主義者の過渡的な一時的な任務であるにすぎない」(注28)のである。スターリンは、これについて、「このようにレーニン

は、ブルジョア民主主義革命の勝利をプロレタリアートの闘争および革命一般の終結としてではなく、社会主義革命への第一の段階および過渡的段階として考えていたという結論が出てくる」(注29)と述べている。したがって、「レーニンによればブルジョア民主主義革命は、社会主義革命への第一歩であり、民主共和国は社会主義実現のための最適の地盤を提供する。プロレタリア階級はブルジョア民主主義革命を主体的に遂行することによって来るべき社会主義革命への主体的条件を準備する」(注30)のである。ではこのブルジョア革命のプロレタリア革命への転化の過程は、レーニンによってどのように規定されているのだろうか。『二つの戦術』においてレーニンは、プロレタリアートは専制権力の抵抗を実力によって粉碎し、ブルジョアジーの動揺を麻痺させるためには、農民大衆を味方にひきつけつつ、民主主義的変革を最後まで遂行しなければならない。プロレタリアートはブルジョアジーの抵抗を実力によって撃破し、農民と小ブルジョアジーの動揺を、麻痺させるためには、半プロレタリア的分子の大衆を味方に引きつけて、社会主義的変革を成しとげなければならない(注31)と述べて、革命の転化におけるプロレタリアートの任務を規定している。そして、「民主主義的ブルジョアジーあるいは小ブルジョアジーがもう一段上にのぼるとき、たんに革命のみならず、革命の完全な勝利が事実となるとき——そのときわれわれは、民主主義的独裁のスローガンをプロレタリアートの社会主義的独裁、すなわち、完全な社会主義的変革のスローガンに“おきかえる”であろう」(注32)(傍点筆者)と述べ、さらに、「われわれはただちに、そしてわれわれの力、階級意識あり組織されたプロレタリアートの力に応じて民主主義革命から社会主義革命への転化を開始す

るであろう」(注33) (傍点筆者)と論じている。このレーニンの見解は、1915年11月に発表された「革命の二つの方針について」のなかで、ふたたび述べられている。すなわち「ツァーリズムから、地主の土地権力から、ブルジョア的ロシアが解放されれば、プロレタリアートは、農村労働者とたたかっている富裕な農民をたすけるためではなく、ヨーロッパのプロレタリアと同盟して、社会主義革命をなしとげるために、ただちにこの解放を利用するであろう」(注34) (傍点筆者)というのである。

以上のように、レーニンのロシア革命論の骨子を通観して、「レーニンはひところ、ロシアではソヴィエト(その権力の階級性格は、労働者、農民の革命的民主主義的独裁と解せられる——筆者)を通じて、革命が平和的に発展することができると考えた」(注35)と、スターリンが述べたことから明らかなように、レーニンにおいては、「ブルジョア民主主義革命と社会主義変革とを、一つの鎖の二つの環として、ロシア革命の発展の単一のまとまった姿として」(注36)とらえられているのである。そして、この「二つの環」を結合するものこそ、「プロレタリアートと農民の民主主義的独裁」であったのである。しかしながら、このレーニンの規定によって、はたして、二つの革命段階の区別と成長転化の実体が、明確にされていると断定できるだろうか。この点について、かつて猪木教授は、「何時プロレタリア階級は民主主義的独裁から、プロレタリアートの独裁へ、民主主義革命から社会主義革命へ進むべきか? この点に関するレーニンの見解はやや曖昧である」(注37)とされているが、確かに曖昧さは否定できないようである。それを受けついで新民主主義概念の不明確性と照応するように、民主共和国＝労働者農民の民主主義的独

裁の段階を、ロシア革命の過程において、どの革命段階に属するものに規定すべきなのか、レーニンの理論においても明確ではないというべきである。スターリンは、「1905年にも、1915年にも、レーニンはおなじように、ブルジョア革命はロシアでは社会主義革命に成長転化しなければならないということから、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命の勝利は、ただちに第二の段階へ、すなわち社会主義革命へうつるために必要な、ロシア革命の第一段階であるということから、出発していたのである」(注38) (傍点スターリン)と述べている。

「ただちに……社会主義革命へうつる」という表現の中の、「うつる」という言葉をどう解釈すべきなのだろうか。レーニンの社会主義革命へ移行するための条件の規定を前提とすれば、「社会主義革命へうつる」という段階は、社会主義革命への過渡的段階(注39)と同時に、社会主義革命そのものの段階を意味するものと、二つの異なった意味があると思われる。

しかしながら、ロシアの歴史的現実、このレーニンの革命の成長転化に関する理論を、その予定されたコースのとおりには貫徹させなかった。つまり、十月革命によって、暴力的な過程を経て、プロレタリア独裁が樹立され、社会主義革命そのものの段階に突入したからである。そのために、この概念的な段階規定の曖昧さは、表面に現われずにすんだのである。しかし、中国の歴史的現実においては、この労農民主独裁の革命権力が、社会主義革命を推進する任務をもつことになったのである。つまり、人民民主専政は、「平和な道をとって」(注40)、社会主義を建設することを保障している。したがって、このような中国革命の現実こそが、ボルシェビズムの革命成長転化の理論に基礎づけられた毛沢東の理論にとって、人民共和

国成立以後の革命段階の規定に、混乱を生じさせた背景となっていると解釈されるのである。

では、人民共和国成立以後の段階を社会主義革命の段階であるとして、規定しようとする新しい見解は、どのような理論的課題と政治的意味をもっているかについて若干の検討を加えることとしよう。

(注23) 外務省調査部編、『植民地民族革命におけるコミンテルンの戦略及び戦術』、29ページ。これについて、レーニンの言葉をあげておく。「この為には如何なる手段が必要であるか、これを前以って言うことは不可能である。これを我々に教えるものは実践的経験である。」

(注24) 『スターリン全集』、第8巻、404ページ。

(注25) 同上、411ページ。

(注26) マスレンニコフ、アルトゥーロフ、シャフル、アヴァーリン、コンスタンチーノフ等は、一様に人民民主專政を第1段階におけるプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の機能をもつものと規定していた。

(注27) 『レーニン二巻選集』、第1巻4、59ページ。

(注28) 同上書、106ページ。

(注29) 『スターリン全集』、第8巻、362ページ。

(注30) 猪木正道、『ロシア革命史』、104ページ。

(注31) 前掲、『二巻選集』127ページ。

(注32) 同上、167ページ。

(注33) 同上、193ページ。

(注34) 『スターリン全集』、第8巻、363ページ。

(注35) スターリン、『中国革命論』、国民文庫版、93ページ。

(注36) 『スターリン全集』、第6巻、114ページ。

(注37) 猪木正道、前掲書、104ページ。

(注38) 『スターリン全集』、第8巻、363ページ。

(注39) 松村一人、『弁証法と過渡期の問題』においては、「完全なプロレタリアートの独裁」への過渡的形態として、権力そのものがある過渡的性質をもちうるという説明がある(86ページ)。

(注40) 中国研究所、『中国資料月報』、第78号、21ページ。

IV 政治指導の実体

すでに述べたように、中華人民共和国憲法草案

に現われた中国革命の段階論は、共和国成立以後の段階を明確に社会主義的改造の段階として規定している。つまり、中華人民共和国の成立に始まり社会主義社会を建設しとげるまでの一つの過渡期において、中国の新民主主義制度は、国の社会主義的工業化、社会主義的改造の完成を保障するものである(草案前文)。そして、このような歴史的任務を有する中華人民共和国は、労働者階級が指導し、労働同盟を基礎とする人民民主主義国家である(第1条)と規定されている。こういった規定は、1940年代からそのときまで続いた毛沢東の理論と比較して、くい違いが存在することは、すでに明らかであろう。しかしまた、レーニン＝スターリンの理論や、中国の理論家たちの社会主義革命段階説と比較して、必ずしも一致しているとも言えないのである。

だが、今ここで、マルクス・レーニン主義のイデオロギーにおいて、中国における社会主義革命が、いつから始められたのかという教義上の厳密な概念規定の問題を一応別にすれば、人民共和国成立以後は、「過渡期」の実質的内容が転換したことは承認されうるであろう。つまり、それ以前の国民党政権を打倒するための反乱＝革命戦争の段階から、新政権のもとにおける建設と改造が課題となっているからである。したがって、社会主義への本来的な意味での過渡的性質を有する「解放」後段階は、それ以前とは本質的に歴史的範疇を異にするものであろう。

だが確かに、中華人民共和国の成立のその日から、直ちに各分野での社会主義的改造が着手されたのではなかった。本格的な社会主義建設を任務とする国家建設5カ年計画が開始されたのは、1953年からであった。それまでの3年間は、人民民主政権の強力な指導のもとに、土地改革、抗米

援朝、増産節約、反革命鎮圧、三反五反運動、思想改造運動、国民経済の復興、地方政権建設工作などの社会主義建設に必要な前提条件をととのえるのに費されているのである。しかし、ここでスターリンの「プロレタリアートの独裁の三つの基本的側面」についての定義を想起してみよう。かれはいう、(1)搾取者を抑圧するために、国土を防衛するために、他の諸国のプロレタリアートとの連繫を強固にするために、また、あらゆる国で革命を発展させ勝利させるために、プロレタリアートの権力を利用すること、(2)勤労大衆および被搾取大衆をブルジョアジーから決定的にきりはなすために、プロレタリアートとこれらの大衆との同盟を強固にするために、これらの大衆を社会主義建設の事業にひき入れるために、また、これらの大衆をプロレタリアートが国家的に指導するために、プロレタリアートの権力を利用すること、(3)社会主義を組織するために、階級のない社会、「社会主義社会に」、「国家のない社会」に移行するために、プロレタリアートの権力を利用すること。プロレタリア独裁は、これら三つの側面のすべてを結合したものである。だが、プロレタリアートの独裁には、もろもろの時期があり、特殊な諸形態と種々の活動方法がある。国内戦の時期には、独裁の権力的な側面がとくに目につく。これとは反対に、社会主義建設の時期には、独裁の平和的な、組織的な、文化的な活動や、革命的法律などが、とくに目につくのである(注41)。こうしたスターリンの定義に従えば、中華人民共和国の成立によって樹立された「新民主主義制度」は、各種の発展段階を経てはいるが、本質的には、社会主義革命の推進のために利用される性質のものであるということもできる。したがって、1949年10月以後の段階は、社会主義革命を保障する政治形

態のもとにおける、社会主義革命の段階であるという主張も、少なくとも、過渡段階での諸政策の実質から判断すれば、あながち、極端にはずれた見解であるともいえない。だが、イデオロギー的側面で、こうした見解を決定的に否定するものが、権力についての階級的規定であった。すなわち、社会主義革命はプロレタリアート独裁のもとでしか可能ではないのである。そして、プロレタリアート独裁に関する従来の一般的規定によっては、共和国成立以後の政治形態の性質を、そういうものとしては定義してこなかったのである(注42)。

『新民主主義論』において、毛沢東は新民主主義革命が古典的な民主主義革命と区別されるのは、プロレタリアートが指導し、第1段階では新民主主義の社会を建設し、各革命的諸階級の連合独裁の国家を樹立することを目的とする革命である点にあると指摘している(注43)。「あらゆる植民地、半植民地国家の革命がある歴史的時期において、とりうる国家形態としては、第三の形態より外はない。それが、つまり新民主主義共和国である」(注44)と述べて、この革命的諸階級の連合独裁=統一戦線的国家形態を、ブルジョア独裁の共和国、プロレタリアート独裁の共和国以外の第3の形態と規定している(注45)ことも周知のところである。これらの見解は、『連合政府論』(1945年4月)においてもきわめて明確に示されているし、同様の論理は、1949年9月の中国人民政治協商会議共同綱領にも示されている。こうみえてくると、中共八全大会での劉少奇の政治報告に示された見解は、延安時代の毛沢東の理論とはまったくちがうものとなったのである。

さて、かつてレーニンが、「権力の問題はあらゆる革命の根本的問題である」と述べたことは有名である。また毛沢東も、二つの革命段階の区別と

連続とを明らかにして、初めて中国革命を正しく指導できると述べているのである^(注46)。だが、段階概念が不明確であり、権力の階級的規定も恣意的に改変されるという現実、どう説明されるべきなのだろうか。それは理論自体が不完全なのだろうか、それとも、イデオロギーの虚偽性、政治指導による操作性を示すとみられるのだろうか。

共産党にとって革命の発展段階の規定がたえず問題となるのは、各段階における戦略戦術の決定という現実的要求からであるとともに、この理論そのものの内在的要求からでもあろう。ここでふたたびマンハイムの言葉を引用すると、かれは「一つの階級的位位置から発生し、浮動的な大衆ではなく、組織化された歴史的集団に基礎をおいている理論は、すべて長期にわたる展望の上に設定されざるをえない。その結果、そのような理論は徹底的に合理化された歴史観を必要とするが、かかる歴史観に基づいて、今われわれはどこに立っているのか、われわれの運動はいかなる発展段階にあるのかと、つねに問われうるだろう」^(注47)と述べる。こうしたマンハイムのいう「徹底的に合理化された歴史観」という観点からみるならば、マルクス・レーニン主義における革命段階の区別と連続についての概念的不明確性は、きわめて本質的な歴史理論上の問題を提起するものだろう。権力の性格規定が恣意的に改変されたことも、同じような意味で、重大な問題をはらんでいる。皮相な概念論としてプロレタリアート独裁論や、社会主義革命段階論が現われたこと自体が、やはり、イデオロギー的概念の政治的操作性を具体的に表現したものであろう。革命の段階や、権力の性格が、イデオロギー的にどのように規定されようと、「党が権力をにぎっており、党が国家を統治している」(スターリン)^(注48)という、権力構造の特質には変

化はないのである。このような状況のもとでは、権力の性格規定は、戦術的配慮と権力の権威づけという観点から自由に改変されるであろう。「現代の全体主義社会においては、指導者はかれらの政治的存在にとって有用なイデオロギー上の武器を注意ぶかく創造し、統御しなくてはならない」^(注49)のである。毛沢東の「過渡期」概念の矛盾をめぐる問題はイデオロギー的論理の枠を離れて、権力構造の実体的分析を行なわなければ、その概念的混乱のもつ客観的な意味は明らかにはならない。

(注41) 『スターリン全集』、第8巻、48～49ページ。

(注42) しかしながら、過渡期の権力としての人民民主政権を、プロレタリアート独裁であると規定する最近の学説には次のようなものがある。過渡期の権力に関する規定——マルクス『ゴータ綱領批判』には、「資本主義社会と共産主義社会との間には、前者から後者への革命的転化の時期が横たわる。それにはまた一つの政治的過渡期が照応し、この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外の何物でもありえない」。レーニン『国家と革命』には、「資本主義から共産主義への移行はもちろん、おどろくべく多くの、多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかし、この場合に、本質は不可避免的にただ一つ、プロレタリアートの独裁である」——から、社会主義への過渡期における中国の国家権力は、当然プロレタリアート独裁であると説くのである。しかしながら、最初マルクスがえがいた資本主義は西欧である。特に沈志遠のように、半植民地、半封建社会は一つの独立した歴史段階ではないから、歴史的発展段階の観点に立てば、現在の過渡期は、資本主義から社会主義への過渡期である、と結論するのは、論理的にもきわめて曖昧だし、権力の規定の論拠は薄弱である。

(注43) 『毛沢東選集』、第4巻、226ページ。

(注44) 同上、236ページ。

(注45) 同上、236ページ。

(注46) 同上、203ページ。

(注47) Karl Mannheim, *op. cit.*, p. 116.

(注48) 『スターリン全集』、60ページ。

(注49) C. T. Friedrich and Z. K. Brzezinski, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy*, p. 96.

(調査研究部東アジア調査室)